

### 意図せざる結果は「誰」に学習されるか

#### -JICA シャーガス病対策プロジェクトにみる青年海外協力隊の潜在的機能-

47-116782 日向 淳

湊 隆幸 准教授

キーワード：開発援助、意図せざる結果、学習、シャーガス病対策、青年海外協力隊

### 1. 背景

開発援助の主流派に対し、イースタリー (2009) をはじめとする援助批判の一群は、援助が実際に作用する「現場」に目を向ける必要性を強調する。

プロジェクトレベルで援助現象に着目すると、援助が引き起こす変化は二つに大別される。佐藤寛 (1994) によれば、援助による意図された変化は「効果」であり、直接意図されたものではない変化は「影響」とされる。佐藤仁 (2005) は、後者を「意図せざる結果」とし、その不可避性と学習の重要性を指摘する。

意図せざる結果の学習についてのこれまでの主な議論は、プロジェクトを越えて学びが蓄積される「長期的学習」であった。一方、プロジェクト内で学習がなされる「短期的学習」については精緻化が進んでいない。プロジェクトにおいて意図せざる結果を瞬時に認知し学習するには、プロジェクト内部に「学習メカニズム」を組み込む必要がある。では、「学習メカニズム」はどのような条件下ではたらくのであろうか。

### 2. 目的

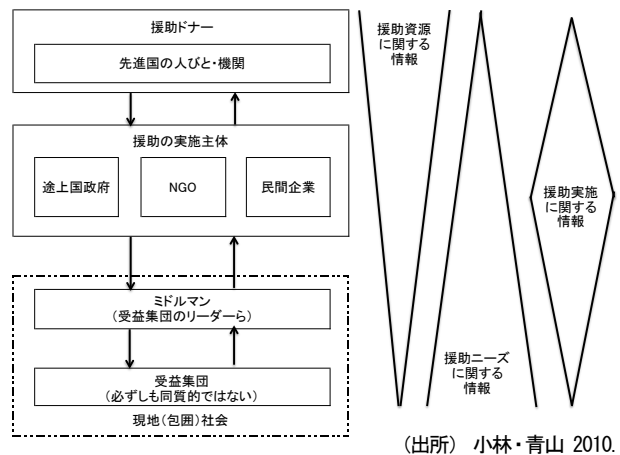
本研究では「意図せざる結果は『誰』に学習されるか」を問う。「誰」と記載したものの、特定の機関や個人を明らかにすることがここでの目的ではない。プロジェクト内部の「学習メカニズム」が機能するにはどのような条件を満たした「アクター」が必要となるかを明らかにする。

### 3. 先行研究

開発援助において意図せざる結果が十分に学習されてこなかった原因には大別して二つある。

ひとつ目は「援助ドナー」・「援助の実施主体」・「現地社会」の間のプリンシパル・エージェント (P-A) 関係である (図 1)。

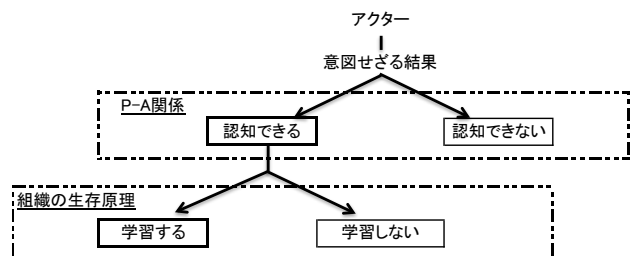
開発援助は国境を越えて行われるため情報のギャップが特に大きく、またそのプロセスには多数のアクターが関与することから、エージェンシー・スラックが生じやすい (小林・青山 2010)。



(出所) 小林・青山 2010.

図 1. 援助過程における主体の連鎖と情報のギャップ

もうひとつの原因は、「組織の生存原理」である。公共政策機関の場合は「任務」と「組織の生存原理」の向きが異なることがあり、組織にとって意図せざる結果を学習しないインセンティブがはたらきやすい (佐藤仁 2005)。ドナーも公共政策機関のひとつであり、一般的に組織の生存原理に引きずられることになる。つまり、P-A 関係、および組織の生存原理は、意図せざる結果の「認知」・「学習」を妨げる (図 2)。



(出所) 筆者作成

図 2. 意図せざる結果の学習構造

#### 4. 方法

本研究では、P-A 関係・ドナーの生存原理から逃れるアクターとして、青年海外協力隊員（以下、隊員）を仮定する。その根拠は、隊員はドナーの一部でありながら、実施主体とともに援助が作用する現場で活動するため、P-A 関係による情報の非対称性が生じにくい。さらに、活動期間が二年間と限られており、ドナーの生存原理からも自由な立場にある。

そこで、開発援助プロジェクトに隊員が位置づけられる事例において、隊員のもつ、意図せざる結果の「学習メカニズム」としての「隠れた機能」を検証する。

#### 5. 事例分析

対象事例として、グアテマラ共和国における JICA によるシャーガス病対策プロジェクト（技術協力プロジェクト）を選定した（表 1）。本プロジェクトは、技術協力プロジェクトの一員として隊員が派遣された稀なケースである。

表 1. グアテマラ共和国における JICA のシャーガス病対策

フェーズ	プロジェクト名称	スキーム	協力期間	内容
準備フェーズ	熱帯病研究対策プロジェクト	-	1991年～1998年	内容：グアテマラ全土におけるサンガメ生息調査
	シャーガス病対策計画	個別事業のパッケージ協力	2000年～2002年	内容：シャーガス病対策への協力開始 投入：個別専門家、青年海外協力隊員、医療特別機材供与
攻撃フェーズ	シャーガス病対策プロジェクト（フェーズ1）	技術協力	2002年～2005年	内容：殺虫剤撒布による媒介虫対策 投入：長期・短期専門家、青年海外協力隊員、機材供与、研修員受入れ、その他
監視フェーズ	フォローアップ協力	-	2006年	内容：監視システムのグッドプラクティスの分析 投入：広域専門家（在ホンジュラス）短期隊員
	シャーガス病対策プロジェクトフェーズ2（持続的監視システムの構築）	技術協力	2009年～2012年	内容：住民参加型の監視体制の構築と定着 投入：長期・短期専門家

（出所）筆者作成

本プロジェクトにおいて、隊員は県レベルの保健管区事務所に配属となり、シャーガス病対策に関わる技術移転、ならびに配属となった保健管区におけるプロジェクトの管理・監督が業務内容として期待されていた。

プロジェクト終了の3ヶ月後に発表されたプロジェクトの終了時評価調査報告書では、隊員のもつ「学習メカニズム」としての機能について以下のように評価されている。

各保健管区におけるシャーガス病対策の現状については、四半期会議における各保健管区の担当者による発表、中央レベルからの訪問指導も実施されているものの、現場における JOCV 隊員による問題把握と中央の専門家との情報の共有がなげれば明らかにならない点も多かった。

JOCV 隊員が保健管区において実施した住民に対する調査・

分析により、住民が頻繁に利用するメディア（ラジオ）と利用時間帯が明らかになり、シャーガス病対策の啓発活動の効果の実施に反映された例もある。

一方、隊員自身の活動報告に着目してみると、派遣期間中5回提出される「隊員活動報告書」<sup>1</sup>から、業務毎にさまざまな「学習メカニズム」が確認された（表 2）。この「学習メカニズム」は四つの機能から構成されている（表 3）。

表 2. 隊員活動にみられる「学習メカニズム」

項目	隊員の活動事例	隊員の機能
データ関連	データの誤り・紛失を発見、改善	認知・フィードバック・対策
地図作成関連	地図の更新、GPSマニュアル作成	認知・フィードバック・対策
殺虫剤撒布	撒布の技術支援、作業環境の改善	認知・フィードバック・対策
供与機材	機材のずさんな利用状況を指摘	認知・フィードバック
啓発活動	啓発効果の低さを指摘、教材の改良	認知・フィードバック・対策
連携促進	地方奥地における NGO との協力	認知・フィードバック・対策
その他	四半期会議の開催要請	認知・フィードバック・学習

（出所）筆者作成

表 3. 「学習メカニズム」の四つの機能

認知	プロジェクトの意図せざる結果の認識
フィードバック	「認知」された意図せざる結果の「プロジェクト」への伝達
対策	プロジェクトにとってマイナスの影響を及ぼしうる「意図せざる結果」に対する「認知」した隊員による解決行為
学習	プロジェクトにとってマイナスの影響を及ぼしうる「意図せざる結果」に対する「プロジェクト」による解決行為

（出所）筆者作成

#### 6. 結論

プロジェクトにおける意図せざる結果は、「二つの条件を満たすアクター」により学習される。ひとつ目は「援助が作用する現場への関与の度合いが高い」こと、もうひとつは「所属組織に対する依存度が低い」ことである。

また、プロジェクトにおける意図せざる結果の「学習メカニズム」は、「認知」・「フィードバック」・「対策」・「学習」の4つの機能から構成されることが明らかとなった。

#### <主要参考文献>

- 青山 和佳・受田 宏之・小林啓明、2010、『開発援助がつくる社会生活 現場からのプロジェクト診断』、大学教育出版
- イースタリー・W、2009、『傲慢な援助』、東洋経済新報社
- 佐藤 寛、1994、『「援助の社会的影響」へのアプローチ』、『援助の社会的影響』、アジア経済研究所
- 佐藤 仁、2005、『「開発」はいかに学習するかー「意図せざる結果」を手がかりに』、新崎 盛暉 他編、『地域の自立・シマの力 上巻』、コモンズ

<sup>1</sup> 資料入手の都合上、隊員全7名の内、3名の報告書を調査した